

## ヘルムート・フォン・グララーゼナツ博士

——高貴なる魂の学——

佐々木 現 順



佛教は自覺的に一つの偉大なる多様性を経験し、又、異質的なものをも採決した。佛教は佛陀そのものさえも無数の諸佛の系列の中に現われる一つの現象として把握し、又、佛陀の遭遇したどの宗教にも、それぞれの位置を与えた宗教である。中国における血なまぐさい宗教戦争も、儒教による排佛運動という強権発動も、単なる政治的行動であり、物語りに過ぎない——此の世における宗教的な根元的姿勢にとつては、それは全く何らの係わり合いもなかったのである。

(ヤスパース『非キリスト教的宗教と西洋』)

私は以上の引用を以て、ここに、フォン・グラーゼナップ博士の学問に関する一つの印象を記し始める。

キリスト教的文化の伝統と生活の中でくらししているヨーロッパ人にとって、東洋的宗教の最大の魅力といえば、寛容の精神——極めて日常的感觉であるが——であるからである。博士の如き広範な全自然とも言うべき偉大な人物の龐大な学問範囲を、わずかに専門の一隅に謬着している私の如き者が批評しうるものでもない。けれども私が、親しく接した風格と彼の心根とを追想し、ささやかな印象を記することになった。

さて、インド学の泰斗フォン・グラーゼナップ博士(1831—1893)はドイツ帝国銀行管理局の副局長の曹子として一八九一年九月八日にベルリンにおいて誕生した。

インド「夢の国」——彼はそう呼ぶ——は彼にとつては彼の魂を養った大きな聖なる財産であった。インドへの憧れは博士の少年時代から彼をとりこにしていたという。一九五七年十月、博士が国際ペンクラブの招待で日本を初めて訪れた時、それが私に語った言葉であった。私事にわたるが、奇しき縁で、私はドイツのハンブルグ大学に就職していた頃、初めて博士と会合し、その後、日本へ来られた時も京都の紹介・案内を受け持つという縁を結び、その後、屢々、博士の論項・著書などの恵送を受けていた。当時、健在であられたマールブルグ大学のノーベル博士(金光明経等の研究と私はインドで一ヶ年起居を共にして研究していたが、グラーゼナップ博士への紹介もノーベル博士によるものであった。今は亡きノーベル博士の好意を思う。

このように、二人の名を挙げたのは、私が曾つて会ったドイツの学者の中で、プロイセン時代の風貌と、ドイツの栄光を一身に担った気概と叡知とを兼ねそなえた学者として、グラーゼナップ博士とノーベル博士とをあげることが出来ると考えたからである。学問は文字通り *Wissenschaft* でなければならぬということを私は両博士によって初めて知らされた思い出を持っているからでもある。この知性的孤高性こそ、ドイツのアカデミカーの等しく伝承して動かない本質であると信ずるものであるが、このことは夾雑物の多い極東の学問の世界を思う時、一層、忘れてなら

ない教訓ともなっている。ドイツでは、貴族とも言うべき生れの人には、日常の生活の上でも *Von* を付して、*Von Glasenapp* とよぶのが礼儀であることは丁度、英国ではインド学者ターナー博士が、サー・ターナー博士というように *Sir* を付けて呼ばれるのと同じであり、今なお、なかなか、この点についてドイツも変わっておらず、伝統的である。だから、それに従って、フォン・グラーゼナップ博士とよぶことにする。

彼がインドを冒険と夢の国とよんでいるが、彼の旅行記 *Die indische Welt* の一章「どうしてインドへ来たのか」の中でも、そのことについて記し、更に、彼は「インドの異国的で而も、ひびきのよい数々の名はより一層、幻覚的美の音をかなでる」と称讃している。

まだ青年であった彼——特に理性的なドイツ人としての彼——及び、その学友達の追及していたものは、言うまでもなく、古代から変革されて来た世界像の限界を越えた新しい思想の相であったであろう。然るに、若きフォン・グラーゼナップ博士がインド哲学・宗教の中に見出したものは、人間性への古い問いとその解答とであった。彼がベルリンのフリードリッヒ・ウイルヘルム高等学校の時、既に、インドについての多くのメモを残していたという。それは、彼がその頃、手あたり次第に読んだインドに関する著作に関するメモであった。

博士がインドへの親近感を懐き始めたのは、曾って、シヨールペンハウワーもそうであったように、インドのバガバッドギータを読んだ十六歳の時であった。更に、以前のことだが、ゲーテはインドのシャクンタラのカーリダーサを読んだり、近世において、ヘルマン・ヘッセが佛陀伝をよんだりした如く、ドイツとインドは民族的にも、言語学的にも、——インドとの関係が我々の日本とインド以上に——親近性を持っている。そうした伝統は、政治的にドイツが植民地政策を取らなかった理由によってインドの信望をえている現代における両者の関係と相俟って、愈々両国の親近性・信頼性の伝承を強固ならしめている。現代インド人にとって、ドイツ人及びドイツの学者への信頼は他国を遙かにしのぐものがあるが、これも永い伝統によって培養されたことと民族・言語の相互関係にもよることが多大な

ることに由ると思われる。

かくて、フォン・グラーゼナップもこの伝統を地で行くことになる。彼はオルデンベルグ、ドイッセン等によるウパニシャッド研究に、次第に動かされ始める。インドの靈性に目を付け出したのはショーペンハウワーの諸著作によるが、言うまでもなく、ショーペンハウワーの『意識と現識としての世界』が大きな影響を与え、みのり豊かな彼の人生を規定するほどになった。

もとより、ショーペンハウワーの哲学はドイツの観念哲学者達から厳しい批判をも受けたものであったが。——私見によればこれらの批判はヨーロッパ人にとっては異質的にみえたインドの幻の哲学が当時、まだ充分、理解されていなかったためであると思う——。インド研究の進んだ現代に於ては、かかる無理解による批判はヨーロッパでも起っていないことをみてわかる。因に言えば、今後、ショーペンハウワーのインド的哲学体系はヨーロッパの学者のみならず、我国の佛教学者によっても、もう一度、研究しなおさるべきでないかと私は思っている。現代の日本における哲学者による佛教批判と解釈の中に、ショーペンハウワーの哲学を越えていたり、それ以上の体系的佛教乃至インド批判を提示している研究が果して如何ほどあるだろうかと思ふ者は私一人ではないと思う。

フォン・グラーゼナップ博士は、ともかく、インドの白象の夢を追ひ始め、遂に、ミュンヘン、ベルリン、ボンにおいて本格的な研究を目途してインド学の一ゼメスターを終えるほどに彼をインド研究へと駆り立てるに至った。リュース、ヤコービ、ジモン、クーン等の諸専門学者が彼の師として続々と登場して来た。これらの諸学者に師事することによって、博士の実ある研究と学問的武器が備わって来た。

チュービンゲンで始められたインド研究は、ボンで博士論文「ジャイナ哲学における業説」を以て一応の切りを付けた。本論文の指導者はヘルマン・ヤコービ博士であつて、ボン大学には高いインド学の伝統があり、近くは先年物故した筆者の畏友だったハム博士もいた。ハム博士は更にチベット学・パリー佛教への新しい領域を拡げつつあつ

た。フォン・グラーゼナップ博士時代はインド哲学の分野に限られていたが、現在、ボン大学のインド学にはハム博士の集めた貴重な文献——特に、チベット、パリー及びジャイナがある。フォン・グラーゼナップの学位論文は一九四二年にボンベイから英訳されて出版されている。更に、彼はベルリンに行き、有名なベルリン大学のインド研究室でヴァンチャのもとでヒンディー語とベルシャ語を修得した。一九一四年、幸か不幸か彼は足の治療のため軍籍から離れたが、その頃、彼は初めて、ベルリンでインド人とめぐり合っている。又、その頃、初めて、ラムリラの演劇をみてインドへの情熱を駆り立てられた。この頃の彼は外交官であり、東洋の弘報部担当として活躍していた。

元来、ドイツでのインド研究者は学者になるためのみでなく、活躍範囲は広く、特に、外交官・銀行・ジャーナリズム等への有望な人材養成のためであった。ドイツ以外の国で屢々、出会うドイツ人外交官の中に、インド学専攻であつて、学位まで持てる人材が多数、見出されるのも不思議ではない。ドイツの根深い文化的外交政策は、実に、我々と全く相違している。又、インド研究を志す人は、単なる宗教・思想の研究でなく、インド民族・文化——総じて、人生の神秘性——への情熱と夢を追う人々である。この点は、同じ、インドへの関心を有する英国と違った点であると思う。英国では植民地政策の必要性の度合が濃く、国家政策が個人の主体性より優位におかれていたと見受けられる。この両国の伝統的インドへの態度の相違は戦後における両国のインド学研究になると明白に現われて来た。即ち、インドという植民地を失った英国ではインド研究への国家的支援も消極的になり、インドへの個人的学問的関心も薄らいでおり、専攻者も英国人の間に著しく減少していると言う。これに対し、古くから、インドへの個人的主体性を重んじたドイツの文化政策は国・政治的変遷の影響を受けなかったため、依然として、インド研究熱は盛んである。この点、大きく言って、国家と学問との関係について、充分、考えねばならない点であると思う——問題を縮小してみても、大学と学問の在り方についても、永遠にして根本的な問題として考うべき教訓であろう——。

博士はボンにおいて一九一八年に教授資格論文がパスして教授の資格を得、続いてベルリンでも資格を得た。因に、

ドイツでは博士号をとった後で、更に、専門分野の業績を積み、論文を再度提出して、教授資格をうることになっている。それを *habilitieren* という。それ程に、アカデミカー資格は高い。フランスの *D. Litt.* にあたると思つてよい。アメリカでの *Ph. D.* は市民権を得たという程度の哲学博士号であり、「博士号は、これから学問してもよいという程度である」と曾つて、フルブライト委員も述べていたので、年の若さはドイツの *Doktor der Philosophie* にあたる。ドイツの教授資格はそれより高い。アメリカでさえ大学関係者は最低 *Ph. D.* (哲学博士) の学位を持ち、そのない教員も助手も大学人ではない。この点で、依然として学問にけじめというものがあることはアカデミアンを信頼せしめる所以となっている。

フォン・グラーゼナップ博士は十一年間、ボンとベルリンで講師 (*Privatdozent*) をつとめあげた (1918—1929)。続いてプロイセンのケーニヒスベルグにおいて、インド学の正教授 (*Ordinarius, Ordentlicher Professor*) をつとめ、最後に、一九四六年より彼の停年退職 (*Emeritierung*) まで (1936) チュービンゲン大学にて、インド学と比較宗教学の教授として務め、名誉教授として、逝去の日、一九六三年六月二十五日まで教えている。ヨーロッパで名誉教授とは停年退職してなお教育にたずさわっている教授を言うので、日本のようなシステム (年令によるもの) ではない。だから、*Professor Emeritus* を名誉教授などと訳するのは誤解を招く。

インド本国との関係はどうかと言うと、その間、屢々、インドを訪ねた。極端に言えば、インド人の住んでいる所は至るところ彼は広く歩いてゐる。おそらく、二十年間にわたって、インドと直接の交渉を持っていたであろう。

博士は、インドで何をみ、何を感じたであらうか。彼がインドでみたものは、おとぎの国——夢の国——と同時に苦悩せる人々でもあった。又、最高の叡知と救助し難いまでの文盲であり、又、強固な先入見と緊張や期待であった。彼は、そのことを彼の著「インド的世界」の中で、又、多くの論項の中で客観的に記録し、そして自らの体験に即して感想を述べている。

このようなインドの両極性は、実は、インドの持っている哲学思想の両極性と無関係ではなからう——と私は思っている。インドにおける自らの生活から彼は万感の思いを懐きながら、いつもドイツへ帰るとき、彼は「ガンジス河の国」の進歩したであろうことに希望を持ち、なおも、訪ねたい衝動をおさえきれなかった。彼の死期の近付いた一九六三—六四年の冬でも、もう一度、白象の国、インドを訪ねる予定であったという。彼を引きつけていた最大のものは、生活の上や哲学の中で見出される両極性の更に根底に、インド的靈性 (indische Spiritualität) を直覚したためであった。彼の多くの著書が今なお人々の胸を打つのは単なる客観的記述に終らない深く美しい魂にみちみちているからであろう。「不朽の著書というものは凡て、学問を越えたものをたたえた著書である」ことを我々に教える。

永年の間、彼が研究して達したものは、ヒューマニズムに生きる人間性というものの本質を信じて疑わなかったことであつた。それは決して合理主義的・前向きの進歩を信ずることではなかった。反って、魂の不滅を信じ、或いは、凡ての存在を自らのうちに統一している最高根元に魂の安らいを見出すところの信仰を形成しうる力を持つもの——そういうインド的信念が彼の到達した内景であつた。そこでは、さかしらに論じ合う学者の議論の争闘も凡てが遠ざけられていた。何故ならば、これらの議論は殆んど、現世的生活の實在を信じていることから起るところのかり、その談合に過ぎないであらうからである。

博士の龐大な数に及ぶ著書の中でも、こういうように、魂をゆり動かすような著書といえ、ここに、我々は『インド的思惟の發展段階』『ヴェダーンタと佛教』『佛教と神の觀念』なる三著書を挙げることが出来る。『インド的思惟の發展段階』は、特に、インド哲学の全貌を体系的に整理されており、又、多くの資料をあげてあるので、單なるインド的靈性の哲学的解明に限られているものではない。インド的思惟を凡ゆる時代にわたって、而も、広範な原典資料を駆使している点で、学問的価値は高く、又、哲学の歴史の変遷をおさえている点で、世界の歴史觀の変遷史に寄与するところも大であらう。博士の方法論は常に、原典及び第一資料を用いつつ、そこにとどまらず、インドの諸

宗教形態の中に、それら諸原典を——思想的パターンとして——位置付けていることである。往々にして、専門分野に深入りしながら、ややともすると、ミイラになるおそれがある専門家に、その学問の人類史上の文化的位置付けを反省せしめるに役立つものとして、専門の学に没入しつつある世人によって、常に、机上に備うべき宝玉であろう。

このような、広範な資料と原典を扱いながら、その方法論において、体系的且つ、思想的筋合いを一貫せしめうるということは、ヨーロッパ特にドイツの学者の特色であるように思う。その理由には先天的なもの、或いは、諸種の理由もあろうが、さしあたっては、彼等の若い頃からの研究・教育の状況によるというのも、その理由の一つであろうと思う。即ち、ドイツの学徒は早くから、専門を二種にして同時に遂行している。インド学と哲学とか、美学と人類学と言ったものである。或る友人のドイツ学者達はインドのジャイナ哲学とカント哲学書とを常に机上において読んでいた者もあり、又、日本文学者が、タイ文化の研究者でもあるところか、日本文学・佛教と同時に現代タイ語を教授していたりすることはドイツでは決して珍らしくない。ドイツ人の体系化好きという我々の先入見からすると一時は意外なことに思われるが、かかる他文化への注目があって、専門分野の文化史上の意味と新しい視座とを得さしめる重要な理由の一つでないかと思うことである。急がば廻れという身近な諺は、どうやらドイツの体系化として具象化されているようである。博士の研究はまさにそのようなドイツ学界の一例であると信ずる。而も、大事なことは、かかる広範の分野の研究を体系化することが出来たのは、常に人生とのつながりを考えていたということである。それのない専門家はたかだか有用な機械の域を脱することが出来ないものである。そして人生に体系を与え得ない。ということとは人々の魂を打つものとして永くこの世に残りえないということである。

博士は諸様の国の文学・哲学と自らをそれぞれの国の本質的核心に投入して同感しうる能力を有し、それらを大きな関連の中に統合することに成功した。彼にとって、諸様な存在の諸現象は単なるドライな理論的探求の対象ではなくして、生々たる現実の生きたドキュメントであった。



博士にとって、インドの、ではなくして、インドそのものが、全インドが、色々な視座のもとで観察され、又、自己形成の要素となっていた。彼自身の人生観がそこで形成されたのである。すなわち、人間性の底に垣間みられる——本質たる星座——「宗教的なもの」das Religiöseを軸として、常に新しく、彼の思想が回転して行った。

比較宗教文化にひそむ困難さは彼もまた身にしみて体験したところのものであるが、彼の著『五大宗教』はまことに、莊麗な珠玉といわねばならない。この著作は彼の死後、縮刷され、要約されて再版された。そこで、彼は、既にマックス・ミュラー博士が引用した有名なゲーテの格言を追憶している。「ただ一つしか知らない者は何も知っていない者である」(Wer eine kennt, kennt keine)。これは散漫に何でも知れというのではない。そうではなくして、博士自身の業績が示すように、一つのことに専心し、それに対する深さが加わると共に、いわば放射状をなす広さも自ずと開けてくるということを意味する。一つのことを深く知ると同時に多くを知ることでもある。

彼は宗教の偉大な結合体を常に学問的に、そして又、大衆的に叙述することに断えざる努力を払っていた。大衆は彼の専門的分析的研究の成果から流れる音調に胸をおどらせ、心はずませて彼の作品に近ずいた。専門学者は彼による専門分野の大衆化の手腕の優美さと艶麗なる文体に目をみはった。真実とは、いつも、大衆にとっても胸を打つところのものとして現われるものであろうか。真実にふれているか否かの判断は、究極のところ、大衆の精神的境位によって決定される——という筆者の信念が許されるとすれば、博士の諸著作はまさに、そのような感動的なものであった。古典的響さえ持っているのである。古典として残るものは凡て、そうだったものであるかも知れない。

凡そ、比較研究——比較宗教・比較哲学・比較文学——は最近、我国でも抬頭して来た新しい分野とみうけるが、如何なる研究でも比較なしに単細胞的に遂行される筈がない。比較を言わずして、如何なる研究にも、既に、遂行されて来ていたし、将来も、そうであるであろう。他文化の名はあげなくても、少くとも、研究対象と自己の体験という最小限度によってでも、絶えず、比較はなされている筈である。比較が異質的なものの比較であればあるだけ、そ

の驚きも大きい。驚きは人々に自己反省を迫る。自己反省は他を意識せしめ、やがて、他を高次の自己につつま。ヨーロッパ人であった博士が東洋たるインド宗教の異質性に遭遇した驚きは、彼をして、学問を人間の学として把えめたのでないか。特に、哲学者であった博士の宗教学としての著作の凡ては人間の学であり、それが、多くの著作を一貫した Leitmotiv であった。いつも音楽に現われ出て来る特色ある楽節のようでもあったのである。殊に、あたかも、河の水は異なれど映ずる影は一つであるように、諸様の現象の上に落す同じ一つの影、即ち、佛教的、叡知の影は彼の心を感動せしめずにおかなかった。それは佛教の持つ寛容の精神であった——そう言いたい。というのは、私が曾つて、博士を、一緒に、佛教各宗派人との談合に案内した時のことであった。博士は会の終了後、私に「キリスト教の世界では見られないことだが」と前置して言われた。「あれ程に、各種各様な佛教の宗派が集りながら、反撥も激論もなく、一つの共通意識を以て語り合えた会はキリスト教の世界ではみられない。」博士は生きた寛容の精神に痛く感激されていた。かかる精神に慣れてしまっている我々は、屢々、精神を忘れてしまつて、私見・議論のための議論に走り、これを以て、学問とよんだりするが、学問の本質を忘れるべきでなからうと反省したことである。彼が東洋の異質性に遭遇して、そこで、驚いたことにより、身を以て体得したことの一つは佛教的寛容の精神であったに違いない。彼にとって、比較宗教学とは異なった宗教の精神を自らに体得し、自らも、そうなることに外ならなかった。

インド学者・宗教学者フォン・グラーゼナップ博士にとって、例えば、カントの定言的命令の如きものが研究の対象ではなかった。彼にとって、研究の対象は人生の原理であった。彼の著 *Kant und die Religionen des Ostens*, 1954 がこの間のことをよく表現している。彼は関係する言語学・古代インド学といった特殊の研究に一方的に従事する学者ではなくして、インドを、それ自身完結した複合的文化形態として把えた。それはゲーテの言葉をかりれば、全自然 *die Vollnatur* と名づくべき頭腦の持ち主であった。

更に、ここで注目すべきは彼の学問の超俗性、貴品ある文体は良きプロイセンの伝統と貴族官吏のプロイセンの伝統の良き要素に基いているということである。良き意味での高貴性はドイツ民族——現代でも——の誇りでもある。ドイツの栄光——時には独善的非社会性ともなつて現われるが——プロイセンの伝統を通じて今もなおドイツ精神の中に生きている。現代ドイツの一部には、その破壊と、又、それへの反抗による空気がたしかに、一部の大学にもみられるが、それはドイツ内に關することであり、一旦、外部に向つては依然として、ドイツの光榮の旗の下に集結するというドイツ文化への誇りを守り通している——こうみえるのが外国人のドイツ觀であるであらう。

彼は、この学問の高貴性とドイツの栄光を、彼の中にも、又、学徒達の中にも残そうと努力した。ドイツの栄光は一言にしていえば、決して外貌を言うのではなく、言わば、現象よりも本質（存在）——単にみえていることよりも、實際に在る、この上に価値をおこうとする伝統のことである。而も、彼は絶えず、変転進歩する新しい現象にも自己を適合せしめえる学者である。彼は、在ること——本質——を確固として見きわめているが故に、みえるもの——現象——を意味付けることに成功した。自らも現象と共に流れることはなかった。ドイツ人のマックス・ミュラーも彼も同じパターンに属する者であらう。

①ドイツのインド学者がそうであるように、博士もまた、インドの本国人の如くに学会人としての交わりを持っていた。全インド・サンスクリット・パリシャッドの会員でもある。この会はインド人を主として会員とするもので、用語は凡て、サンスクリットでなされる高度の学会であり、インドのパンデイトを主会員とするものである。インド政府の Indian Council for Cultural Relations の会友でもある。インド政府のこの Council (ICCR) は諸外国の研究・資料を支援する機関であり、筆者も曾つて、Indian Social and Humanistic Life in India の著書作成のためインド社会研究に招かれたこともあり、この機関の活動を知ったことであるが、そこでも又、フォン・グラーゼナップ博士及びドイツ人学者への政府の信頼感に接し、羨ましい思いをしたことを記憶している。又、博士は一九五三年に、

インドのミッドル・インド語の辞典を提出して政府より優遇され、続いて三年後には、佛滅二五〇〇年祭にインド政府の賓客としてデリーに趣いた。彼の多くのインド旅行その他、アフリカ・アメリカ等の旅行は殆んど自費を以てなされたが、一九五六年の旅行は数すくない政府招待の旅行の一つであった。その後、現代においては国家間の交流も増し、特にドイツの学者には政府及び公金による研究旅行 *Wissenschaftstourismus* が多くなったことはドイツ政府の学問理解の高さを示すものであろう。

一九六一年、ジャイナ研究所から名誉博士の称号を得ている。ドイツでは佛教研究とジャイナ研究が盛んであることは筆者も屢々、報告して来た。ドイツの東洋学研究史という点から言えば、ドイツの佛教研究は学問のみならず、哲学・思想として、又、一般には人生観として、インド専門家のみならず、文学の上でも広くとりあげられた歴史を持つ。これに対して、ジャイナ研究は、研究の領域内に限られていて、広くドイツ文化圏にはゆきわたっていないように思われる。彼がインドの側から言えば、佛教学よりもジャイナ研究の方が高く、広く、評価されて、インド人に迎えられている。インド本国ではジャイナ研究が——古典研究としても生きた宗教としても——最も活潑であるから、それを促進するドイツのジャイナ研究が大々的に宣揚されるのも尤もな話であろう。これに対して、佛教はインドよりも他国の方が学者も多いため、インドとしてはジャイナ研究ほどに関心を持っていない。ドイツのジャイナ研究はハンブルグ大学・ボン大学が中心的存在である。我国におけるジャイナ研究は今後の展開を待たねばならないが、ただ、言えることはジャイナ教は生きている宗教であるから、古典も生きものであるということである。従って、ジャイナ教の生きていない国での研究は極めて困難であり、ややとすると形態的なものとなるおそれが多分にあるのではないかと推察する。

博士はインドのみならず、自国のドイツにおいて深く尊敬されていたことは言うまでもない。

博士は一九四九年以後、マインツのアカデミーの会員であり、又、ダルムシュタットのアカデミーの正会員として

重きをなしており、文学者のペン・クラブにも属していた。マインツ・アカデミーは——他のドイツのアカデミーと同じく——インド研究には特に支援を惜しまないというドイツの伝統を持っている。佛教のパーリ大辞典事業なども支援しているアカデミーとして知られている。元来、ドイツのアカデミーはその名は日本の学士院と類似するが、実的に相違している。これは地方に散在し、統一的一組織ではない。然も、その会員は長老やボスの集りではない。真に活躍しうる能力を有する人々が地方自治体より充分な予算を取り、且つ、実際に、アカデミーの名の下で活動している学者を以て組織されている。この点、日本学士院と——予算の点でも——大きく違っているように見受けるところの全くドイツのみの組織であろうと思う。東洋研究者の数が多くないことにもよるが、ドイツではボンを中心としたかかるアカデミーの援助を受けて研究旅行・個人研究・外人招待等の事業を可能にしている。

博士の業績には純学術的著作のみならず、文学・翻訳・評論にも及び、且つ、文体は文筆家をしのぐものがある。ペン・クラブ会員たるにふさわしい。この文才も博士の人格と情熱のもたらす賜物であろう。

博士の七十歳誕生記念にはドイツ政府より、最大の榮譽とされる大功勞賞 *der Großen Verdienstkreuz* を授与されている。特に、彼が喜んだと伝えられているのは、記念論文に寄せられたところの彼の畏友ラダクリシュナンの序文であったという。ラダクリシュナン博士は政治的にはインドの副大領であり、学界では最高の哲学者でもあった。インドでは、三名の最高責任者がいる。大統領・副大統領・首相である。当時、ネルは首相で、プラサッド博士は大統領であった。曾つて、筆者が直接にプラサッド博士から聞いたところによると「インドでは政治責任者は賢明でなければならない」と言う。副大統領たるラダクリシュナンは学界の会議・文化会議等なる知的会合を受けもつ、ネル首相はその下にいて政治にたずさわるという三役が三人によって分担されている。筆者の追憶を述べて恐縮だが、曾つて、筆者がハーバード大学にいた頃、ラダクリシュナン博士に会った時(1960)博士は夕方私宅に、わざわざハーバード大学在学中の孫娘さんをつれて、突然、訪ねて来られたことがあった。世界の大長老と同席した私事の思

い出を語るの、実は、その時の博士の示したインド文化の世界における重要性への信念であった。従って、博士は外国のインド研究者に対する熱意は予想外の好意となつて表われていたからである。その時、博士は筆者を同じ東洋人と知ってか「アメリカのインド研究に対する批判と意見を率直に聞きたい」と申し出られ、同じクッションで誠に気軽に話された夕を今なお思い出す。私の如き一介の遊子にでも、東洋人の故に示された博士のインド文化への情熱と外国人たる我々研究者への好意を思うと、グラゼナップ博士の如き世界的学者への言葉は最大を極めたものであった。私もグラゼナップ博士の喜びの一端を想像することが出来る。又、ラダクリシュナン博士と外国人たるグラゼナップ博士との遭遇は実は、外国におけるインド研究者全体に対するラダクリシュナン博士の好意をシンボリックに現わすものである——と我々インド研究者は受け取りたい。

博士の豊富なる知識は学問的及び文筆家としての多くの作品を世に送り出した。それらは又、弟子や一般の学徒によつて受けつがれて行っている。凡て、真実の師——彼が精神的師であればあるだけ——の精神と学芸は、良き弟子の上になうけつがれるとき、より一層高い標準へ達しうるのである。我々は、グラゼナップ博士の学問よりも何よりも、その高貴なる人格に心を引かれる。ここに言う高貴なる人格とは対人関係というような私的な意味においては無い。「西洋的生活と論理の中に生きつつ、それを超えて、聖なるものを東洋のインドにおいて発見し、それを自らの信条として一生を終えた人である」という意味においてである。西欧人が東洋の真理に生きるということは誠に至難であつたであらう。単なる文献家にはかかる魂の超越もなく、魂の内在化もない。真の学者とは文献をふまえながら、文献の意味を人間性の上で把握することの出来る者を言うのでなからうか。

ヘルムート・フォン・グラゼナップ博士こそ、まさに、近世における偉れて高貴なる唯一の学者であつた。

註① 本論項は W. Nölle, *Helmut von Glasenapp*, ZDMG, 114, 1964 に準じて、私見を追加したものである。インドにおける博士の信望を証するものとして、博士の死後、インドの各種の新聞・雑誌で追悼の論項が出版された。W. Nölle が前

掲文の中で、それをきこめつめけつるが、それを一般読者及びインディアン研究者の便のため、ZDMG の記録をうけとめ録して得るべ。German News Weekly, Vol.V., no.26; Voice of Ahimsa, Vol. XIII, no.7; Indo-Arian Culture, Vol. XII, no. 1; Darshana International, Vol. III, no. 3; Cultural Forum, no. 22; The Mahā Bodhi, Vol. 71, no. 10; Indian Philosophy and Culture, Vol. VIII, no.3; Max Mueller-Bhavan-Yearbook 1963 etc. W. Nölle, Helmut von Glasenapp, Max Mueller Bhavan Publications, South Asian Studies, Vol. I, New Delhi 1964.